

**日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（26年度採用課題）書面評価結果**

領域・分科 （細目）	人文学・史学（史学一般）		
研究交流課題名	新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築		
日本側拠点機関名	東京大学東洋文化研究所		
研究代表者 （職・氏名）	教授・羽田正		
相手国側	国名	拠点機関名	研究代表者所属・職名・氏名
	アメリカ合衆国	プリンストン大学	Department of History・Professor・Jeremy ADELMAN
	フランス共和国	社会科学高等研究院	Research Centre for History・Directeur d' Etudes・Alessandro STANZIANI
	ドイツ連邦共和国	ベルリン・フンボルト大学	Institute of Asian and African Studies・Professor・Andreas ECKERT

総合的評価（書面評価）

評 価

- A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

コメント

本交流計画は順調に成果をあげつつあり、当初の目標を達成することが概ね期待できるものである。方法論・研究蓄積において、世界のトップを走る欧米の各研究機関を交流対象に設定したことが、計画の成功に大きく寄与していると考えられる。

前半2年間は、堅実、順調に計画を実施してきているが、4拠点がいわば手持ちのカードを出し合う期間であったと思われるため、後半は、この交流計画によって初めて切り開かれたと言えるようなグローバルヒストリーの可能性について、具体的な研究テーマを通じて学界に提示していく必要があるだろう。

具体的に学術的側面では、各海外拠点とのサマースクール、一般向けシンポジウム、セミナー及び研究者交流を通じ、「新しい世界史理解と叙述の探求と確立」に向けて、研究者および学生の継続的な意見・情報交換が実施され、相互理解が相当程度進んでいると認められる。現在編集集中の論集『グローバルヒストリーの可能性』は、研究のさらなる展開へのステップとして刊行が待たれる。一方、「ミクロな歴史研究との交流」をいかに遂行していくかについては、若干課題が残るが、旧被植民地国・発展途上国の研究者・研究機関を取り込む形で事業を拡大展開することにより、展望が開ける可能性を感じる。東アジア、東南アジア地域との新しい世界史／グローバルヒストリー構築の試みは、今後の国際的な研究教育連携として、積極的に検討すべきと思われる。

若手研究者の育成では、国内外での共同セミナー、サマースクール、シンポジウムでの研究発表、海外の各拠点への短期派遣などを通じた交流及び事業目的に沿った論文の執筆などの機会を提供しているが、効果が表れるまでには今少し時間がかかると思われる。国内では、拠点機関・協力機関以外の大学院生にもサマースクール参加を募っていることが注目できる。優秀な若手研究者の発掘、育成への波及効果を期待したい。

研究教育拠点の構築では、海外拠点と複数回の共同セミナーにくわえ、2年目からはサマースクールを実施するなどして、順調に研究教育活動の連携を深めている。

今後は、国内の諸研究教育機関との協力体制の構築も重要である。中間評価資料を見ると、国内からの共同研究参加はやや東京圏に偏っているように見えるため、国内で波及効果を高めていくために考えるべきことがあるだろう。

1. これまでの交流を通じて得られた成果

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。 ・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。 ・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。
-----	---

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果があがっている。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果があがっている。 <input type="checkbox"/> ある程度成果があがっている。 <input type="checkbox"/> 成果があがっているとは言えない。
コメント
<p>・ 研究交流活動を通じて「学術的側面」「若手研究者の養成」「研究教育拠点の構築」の観点から成果があがっているか。</p> <p>学術的側面については、研究交流目標の1つ目である「新しい世界史理解と叙述の探求と確立」に向けて、各海外拠点との共同セミナー・サマースクール・シンポジウムを通じて、研究者および学生の継続的な意見・情報交換が実施されており、相互理解が相当程度進んでいる。日本側コーディネーターの羽田教授が積極的に関連論文を発表しており、ドイツ側拠点のConrad教授も2年目末にグローバルヒストリーの方法に関する書物を刊行するなど、意欲的に学術成果を発信している。2つ目の目標である「ミクロな歴史研究との交流」については、1つ目の目標をふまえて各研究者がどのような内容の論を展開したかを検証しなければならず、論文リストだけでは評価が難しいものの、研究者各自の専門を基礎にしたグローバルヒストリー構築の試みをタイトルとする研究が相当数発表されていることは疑いがない。今後は、こうした個別の試みをいかにして総合していき、問題点を抽出し、真の意味でのグローバルヒストリーとして総合的にまとめあげていく作業が課題となるだろう。その意味では、現在編集中とされる論集『グローバルヒストリーの可能性』の刊行がそうした課題を克服するための次のステップとなることを期待したい。しかしながら、この交流計画以前からすでにグローバルな観点で個別研究を進めている研究者の研究継続について、本課題の交流活動によって新たに生まれた視点や解釈があるかどうかは必ずしも明確ではない部分もある。</p> <p>若手研究者の育成については、国内外での共同セミナー、サマースクール、シンポジウムでの研究発表、また海外の各拠点への短期派遣などを通じての交流やアドバイス、また事業目的に沿った論文の執筆などの機会を提供する場として本課題が有効に機能することが期待される。ただし、中間評価時点では、論文および学会発表はそれほどなされていないため、今後は、若手研究者が個別に、また相互にスキルアップをし、論文および学会発表に積極的に参加することが求められよう。</p> <p>研究教育拠点の構築については、すべての海外拠点と複数回の共同セミナーに加え、2年目からはサマースクールを実施するなどして、順調に研究教育活動の連携を深めてい</p>

る。海外拠点もそれぞれ独自のマッチングファンドを獲得しており、共通する課題に向け、共同して研究に取り組む体制が構築されつつあり、期待どおりの効果があがっていると思われる。

一方、国内教育拠点としての活性化は、東京大学の諸研究科、その他の国内大学との連携に課題を残している。

- ・ 研究交流活動の成果として優れた研究業績が発表されているか。

コーディネーターや海外拠点の研究代表者が中心となって学術交流のみならず、論文や発表を積極的に行っていると認められる。海外拠点では、ドイツの Conrad 教授が2年目末にグローバルヒストリーの方法に関する書物を刊行するなど、拠点構築と学術交流の成果が表れてきていると考えられる。

ただし、以前からグローバルな視点による個別研究を行ってきた研究者の継続的研究の成果があり、この研究交流によって初めて可能となった研究とその成果を特筆できるところまではまだ進んでいないというべきであろう。

編集集中の論集『グローバルヒストリーの可能性』は、残る期間における課題の円滑な遂行のためにも刊行が待たれるところである。

- ・ 研究交流活動の成果から発生した波及効果はあるか。

本課題を核として、チリなどの他国や地域（特に旧被植民地国や発展途上国）とグローバルヒストリー関連の研究教育の連携を模索する動きへと進展する可能性がでてきたことは、波及効果と言って良いだろう。

また、研究者間の交流に閉じることなく、新しい世界史／グローバルヒストリー理解の重要性を一般社会に広く発信していくため、一般向けシンポジウムを開催している。今後も講演会、書籍や論説の発表が予定されており、波及効果と呼ぶに十分な成果が生じるかについては、今少し観察することが必要であるが、社会への還元意識については評価できる。

加えて、国内では拠点機関・協力機関以外の大学院生にもサマースクール参加を募っていることが注目できる。優秀な若手研究者の発掘、育成への波及効果を期待したい。

2. 事業の実施状況

観点	<ul style="list-style-type: none">・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。
----	---

評 価
<ul style="list-style-type: none"><input type="checkbox"/> 想定以上に効果的に実施されている。<input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施されている。<input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施されている。<input type="checkbox"/> 効果的に実施されているとは言えない。
コメント
<ul style="list-style-type: none">・ 研究交流目標達成に向けて、「共同研究」「セミナー」「研究者交流」を適切に計画し、実施しているか。 <p>共同研究については、「共同セミナー」を中核に位置づけての、メリハリのある実施と、「立場性」「スケール」といったテーマ選びのエッジの切れを高く評価できる。また、セミナー、研究者交流（シニア交流、ジュニア交流）についても適切に計画され実施されている。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 国内外の拠点機関及び協力機関間の実施体制・協力体制等は適切であるか。 <p>国内拠点は参加人数、構成、専門に照らして申し分ない研究体制が整っている。海外拠点では、当初の人数がやや少ない印象があるものの、1年目後半から2年目にかけて大幅な人員追加を得て十分な体制が整った。アメリカ拠点とは平成28年9月から新たな学術交流をスタートする予定になっており、協力体制のさらなる強化が図られており、期待以上に実施体制が整ったと認められる。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 研究交流活動の実施にあたり、適切に経費が執行されているか。 <p>目的に沿った適切な執行と判断できる。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 相手国において交流を行うに十分なマッチングファンドが確保されているか。 <p>アメリカ・フランス・ドイツの対象3カ国いずれについても、十分なファンドが提供されている。</p>

3. 今後の研究交流活動計画

観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。 ・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。 ・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。
-----	--

評 価
<input type="checkbox"/> 想定以上の成果が期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> ある程度成果が期待できる。 <input type="checkbox"/> 成果が期待できない。
コメント
<p>・ 目標達成に向けた計画が具体的であり、かつ実現性の高い内容となっているか。</p> <p>これまでの共同セミナーやシンポジウム、サマースクールなどの事業実施状況から、残りの期間で新しい世界史／グローバルヒストリーの意義や研究について、4 拠点が連携する体制構築を進め、さらに拡大していくことは十分に期待できる。</p> <p>・ 今後の課題がある場合には、それを検討し、適切に対応しているか。</p> <p>旧被植民地国・発展途上国における研究者・研究機関を取り込む形で事業を拡大展開すること、グローバルヒストリーの方法における内外の関係学会での共有を越えて、一般社会の「常識」としていくことが今後の課題として挙げられている。</p> <p>前者については、日本側拠点機関の長所を生かし、東アジア・東南アジア地域から事業を拡大展開する、あるいは参加予定のチリのフォーラムでの交流を手掛かりにするとされているが、どのような国や地域、あるいは研究機関といかなる研究教育連携が可能であるのか慎重に検討する必要がある。後者については、一般社会に向けて書籍の刊行、講演活動、ウェブなどを活用していくとされているが、これらは問題への対処法として適切な手段と認められるため、一般社会への積極的な成果の発信を期待したい。</p> <p>・ 経費支給期間終了後も、当該分野における国際研究教育拠点として継続的な活動を行うネットワーク構築が期待できるか。</p> <p>海外拠点との研究協力は本課題によって深まっているため、継続的な活動が期待できる。ただし、実際に日本側拠点機関が主催あるいは共催して、共同セミナーや研究者交流を実施しつづけるためには、日本の研究者を海外渡航させる旅費を確保するという大きな資金的課題がある。東洋文化研究所という組織の土台があるので継続性が期待できるが、成果の公開や事業の重要性を継続的に広く発信していくためには、外部資金を獲得する努</p>

力が求められよう。